

欧米の最新都市デザイン

欧米先進都市のアーバンデザインの今日

——いくつかの都市の現場から

西村幸夫(東京大学教授)

日本の都市デザインのこれからを考えるために

日本の都市デザインは1960年代の都市拡大期の建築群計画といった「図」を描き出すプロジェクトから始まり、都市安定期にさしかかるに従って次第に都市空間の高質化へ向い、さらには自ら手を下すデザインプロジェクトから他者のプロジェクトをコントロールする景観規制といった「地」の整備への傾斜を経て、都市停滞期に入ってからはおつぱら合意形成プロセスのデザインといったソフトな都市経営戦略へと時代背景と共にデザインの対象を変化させつつ今日に至っている。

コンパクトシティや持続可能性が

同様の意識は公共交通機関や自転車への思い入れという点にも見て取ることが出来る。
魅力的な路面電車のデザインやスムーズな乗り換え空間の実現、自転車走る風景へのこだわりなど、コンパクトな都市という命題を大風呂敷のマスタープランとして示すのではなく、都市における生活スタイルの提案としてデザインしていく、というスタンスが各都市にはほぼ共通している。都市をデザインするというより都市生活をデザインする、といったほうがこれらの都市のアプローチをより正確に表現することになるだろう。

都市のユーザーの視点での都市デザイン

このことはすなわち都市をプランナーの目あるいは為政者の目で見渡すのではなく、ユーザーの視点あるいは都市生活者の視点から見ているということを意味している。
したがって、たとえば駅には都市の顔としての威容が必要である以前に、誰にでも容易に空間移動が出来

叫ばれる昨今、都市デザインは今後どのような方向を目指していけばいいのだろうか。

同様の岐路に立たされている欧米の諸都市における新しい方向を目指す都市デザインの試みのなかに共有すべき視点を見いだすことができるのではないかと考え、関心を同じくする若き仲間とともにこの小特集を編むこととした。

扱ったのはニューヨーク、ロンドン、マルセイユ、シュツットガルト、バルセロナ、フローニンゲン(オランダ)などの都市である。詳細は各章に任せるとして、導入としてここでは諸都市を俯瞰して見えてくるいくつか共通した関心について指摘しておきたい。

るといふわかりやすさが求められることになる。歩行者空間の重要性が増し、歩行者の容れ物としての街路空間のデザインが要請されることになる。

全般的に「図」づくりに入れたてきたパロディ的な都市デザインではなく、安定した「地」を都市に根付かせていくような都市デザインが主力となっている。

しかし、そのことは「図」そのものが不要だということを意味しているわけではない。都市に生活するにあたっては「図」としてのシンボルが不可欠だということはユーザー側からも言われている。赤煉瓦の東京駅が再生されたことは丸の内地区や千代田区、地方政府にとって意味があるだけでなく、圧倒的に多くの生活者としての東京人の支持を得ているのである。

ただし、その場合の「図」はヒューマンスケールと何らかのつながりを持つていなければならない。そうでなければ、「図」は市民のものと感受されるというよりも権力の装置と化してしまい、市民はよそよそし

都市生活のイメージを提起する都市デザイン

多くの都市に共通した傾向として、比較的小規模な公共空間へ介入することに對する高い関心をあげることが出来る。バルセロナやニューヨークはそのフロントランナーである。都市にとって戦略的に重要な立地の小規模公共空間の創出や改善——具体的に広場や街角のコーナー・デザインや新規創出である。大きな構想よりも小さな実践を尊重し、都市生活の具体的な改善の姿をプロジェクトを通して見せることに力点が置かれているようだ。
こうした都市デザインの小さなプロジェクトの大半は都心が都心近接地で

か感じなくなるからである。東京駅のスケール感および細かなディテールが、そのことをよく示している。

市民に受け入れられた東京駅とアレギー反応がある新国立競技場のコントラストはこうしたところにあるといえる。

都市内のモニユメントや都市そのもののスカイラインをなんとか保持していこうという都市デザインも、トップダウンで託宣が下されて規制されるのではなく、都市のユーザーたちの願いが世論となってプランナーを後押ししているのである。

多様性や持続可能性への解を模索する都市デザイン

他方、結果的にハードに帰着する空間改善だけに専心していいのかわ、という今日的な問いかけが都市計画全般に対して行われているのもこのところの共通の傾向である。

たとえば、都市そのものの持続可能性や文化的経済的な多様性を保持した地域社会のあり方など、都市を巡るおおきな課題の中で都市デザインにどのような貢献ができるのか、

あるので、都心再生の一環を担った施策の一部であるとも言えるが、大きな構想を表に出すよりも、地に足がついた地道で具体的な改善策を、少しずつでも着実に実現していくことに力点が置かれている。

そこで目指されているのは、都市生活を豊かにしていくイメージリダーとしての役割をプロジェクトが担っているということである。

もちろんその背景には地方政府に十分な資金的余裕がないためにかつてのような大規模公共事業を行えないということも少なくはないが、それ以上に都市デザインの効果的なつぼをねらってプロジェクトを仕掛けるという戦略的な布石に力点が置かれていると言っていることがある。

ということが問われている。これは、都市のプランニングという全体の枠組みの中で都市デザインがどのような役割を担うのかという問いかけだと翻訳することもできる。

この点に関して先進諸都市の施策を見ると、文化政策としての中層住宅を軸とした歩いて暮らせる都市の推進や路上のアクティビティの復活などの都市デザインのポキヤブライの実現によって、側面的に都市の多様性や持続可能性への回答を模索しているようだ。

文化の力

このように欧米先進都市の都市デザインの現在を見てくると、21世紀の都心を牽引していくのはまぎれもなく文化の力だということに対する確固たる信念があるように見える。

そしてそうした先進都市の文化政策の一翼を担うものとして都市デザインがある。現場におけるデザインを力を前向きに信じて、そこから次の時代の都市文化政策が生まれ、試みは実感させてくれる。